

文 學 雜 誌

銀 鈴

明治三十七年
十一月三日發行
(定價參錢)
(郵稅貳錢)

第 貳 號

石見邑智郡
田所村
銀 鈴 社

目 次

觸目語(評論).....

醉の日(短詩).....藏田二葉

遠 淺(俳句).....京都醫科大學 衣 川

結 婚(小説).....杏 朗

玉 舟(短詩).....大屋桂水

若き作者に(英文).....K 生

作 歌 談(評釋).....袖 影

微 響(短詩).....新涼會詠艸

編 輯 日(雜文).....桂水、翠漱

社 告.....

作歌談

(一)

袖

影

歌を詠まんとする、初學の人の參考にもとて、書連ぬるあり。敢て大方に示さんためにあらず。近頃物騒の世の中、そんなによそこらに口尖らせん人もおはすべければとて、特にことばり書きをそむ添ははべりぬ。

さて新らしき歌試みん人達は、詩とは如何なるものなりやをわきまへ、古き家集撰集のたぐひは固より、廣く文學の上、歴史、修辭等の素養あかるべからず。斯くいへばあまり六ヶ數もの、やうに聞こゆれど、初學のうちは色々には等を修むる傍はら、絶わざ古きを温ね、新しき思潮にも觸れつゝ、惡しからば惡しきがまゝに詠み出で、幾度も補削訂正せんことを要す。一氣呵成などは云へ、推敲は輕んずべからざるものぞ、漢語歐語を用ゐ若くは朦朧なる体を學びて新派と心得あべ間違あり。さりながら、厘か三十一字のうちに、彼の散文にも優らん効果を收斂んとするものなきば、出來得るだけ語句の節約をなし、枕詞などの如き無意味よして興味索然たるものは必らず避くべきもの也。歌には限らざれ

ご總べて文藝の作物は、新らしきをこそ貴べ、陳きもの、鸚鵡返しは何等の興なきものなれば、力めて人の到らぬ微を穿ち粹を抜かざる可らず、月は悲しきもの、やう能く聯想の材となれど、餘り繰返しなば、却りて嘔吐の種ともなりあむ。新作の歌よく味ひて、折柄の傾向風調を究めあべ益する所多かるべし、余は次號より詳しく新派和歌の評釋及び詩歌研究の材料となるべきものも記すべし。

此の文わざと古体に擬したるは、聊さの思ふよしありてあり。そは事のついでもて發表するの折あらん。

豫	一紙員の増加 一懸賞募集の擧 一批評欄開始
告	一寫真版挿入 一雜報欄新設

微

響

(新涼會詠草)

この思ひさあらぬさまによそはひて
山下あき子(石見)

笑とて門出の人おくる今朝

秘めおきし理想たもひのやのほ地に生たひて

咲けるか菊の成りしよそやひ

○ 田邊 馬笑(石見)

山男山にし入れやまおとこば山幸と木れ間

くぐりて得し茸かな

○ 河野 素陽(濱田)

せせらぎのちひさき音のひとつにも

美し歌はこもりなむもの

○ 前田 木風(伯耆)

朝月になにの怒りぞむを獅子の

くるひ出でつる緋牡丹の花

天つちに星地には花の靈あれど我が歌

いかに神うごかさぬ

○ ちか かり(石見)

さらばよと城が名よびてわが泣けバ

よわしと笑みて山はゆるるがぬ

(城山にわか
るるとて)

○ 中村 秋泉(神戸)

草花の火焰ほのほと燃ゆる靄の野をかづき

ゆるうも漂ふ今か

○ 増野 紫星(石見)

春のうとにわかき舟人帆をあげぬ

おゝ浪風の路たひらなれ

○ 山本 明星(出雲)

詩にたかきミユーズの神の使なる君

がみ袖に掩はれば足る (翠激の君に)

○ 河野 翠激

雲しづか山幽にして鳥啼かぞ

秋さゝわたる風をこそ問へ

寝ころびて呼べば雲より木精こだまして

山に相倚るわづの懐か

▲前號「紫英」中「花の香は」の歌は入澤涼川君の作
なりしを校正の際誤りて大屋無價珍君の作とし
たり、之を正す。

▲前號募集の短歌題「袖」は都合により次號に發表
すべし。十二月五日までに應募の分を加へ載せ
む。

編輯 日

本紙編輯の當日——十月九日、窓の朝日に、失敗の
たと床をはね除け、食事もそこそこ、下駄突ッかけ
て小走りの一里。朝寝坊の翠激も、今朝こそはと胸

おどらせて来て見れば、いやはや、澄ましたもの。朝風子は未だ。

いつも定刻に來たことの無い僕、今日も一時半の遅刻であつたが、まだ始まつて居なかつたので胸撫で下ろした。暫くして。テツキ振り／＼朝風子が來た、さア人数がそろつたといふので編輯にゐつた。

(以上、桂水)

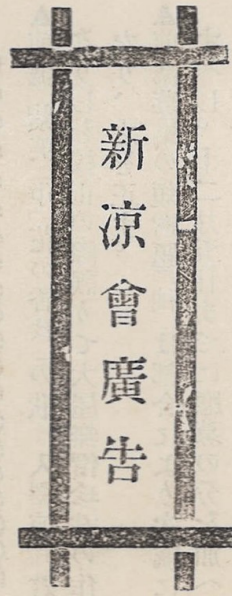
集まつた原稿を順次桂水朝風に廻す。「まづいなア」若くは「佳いぢア」を繰り返して、取捨宜しくありて、さてお互に何か書あうと云ふ。見ると室内は煙草の烟で白朦々。

各々筆を執つて、シツと考へ込む。併して覽の通り、諸君を驚かすものも出來あつた。この時朝風子傍らより「おい／＼長く書くともう餘白がぢいせ。」呵々大笑して冷語を放つ、僕及び桂水苦笑この稿を終る。
(以上翠激)

社 告

●本號は尙紙數を増加し材料をも精選すべき計畫の所、諸般不整頓の折柄亦不全完ある躰裁に終りたり。次號は來む新春第一日を以つて社中同人等大肌拔の勉強にて、外形内容の上へ新意匠を加へ大家の寄稿及び寫眞版をも

掲ぐべし。次號の材料として詩歌小説美文評論俳句其他十二月五日までに寄稿せられたれし、半紙半面十行二十字詰の事。
●本誌前號の代價未納の諸君は此際本號分と相併せ急々御送附を乞ふ、特に懇續す。



新涼會廣告

會友募集

本會は短歌の研究創作に従ひ、この主旨を賛める會友を募集す。會友は毎年壹圓の會費を納むる事但し分納を許す。會友には「銀鈴」無代配附すべし。會友の短歌ハ「銀鈴」に掲載し隨時單行詩集を發行し頒布す。本會は河野翠激之を主幹とす。
銀鈴社内 新涼會

明治三十七年十月廿五日印刷
明治三十七年十一月三日發行

(本誌一冊代價參錢) 郵税 貳錢ツ

島根縣邑智郡田所村大字下田所七百三十二番地 編輯兼發行人 河野 岩 雄
島根縣松江府松江分八百二番屋敷 印刷 人 鶴 見 儀 市
島根縣邑智郡田所村大字下田所 發行 所 銀 鈴 社